

消え行く星に

進 藤 賢 一

1998年の3月、文化学部の有志10名ほどでインドネシアのバリ島を訪れたことがあった。作家の宮内勝典が書いた「バリ島の日々」を読み、えらく感動を覚えてバリ島行きを期待していたときでもあり渡りに船だった。宮内さんは文化学部の「北方文化フォーラム」でも講演されたことがあるが、多分高橋康雄さん達が呼ばれた方ではないだろうか。高橋さんは、雑誌「潮」の編集長など出版業界にいた時期が比較的長かったのでかなり人脈が広い。沢山の著名人とかかわりあいがあったように思う。

バリ島のホテルでは滞在中、ずっと高橋さんと同一部屋だったから酒を飲みながらいろいろな話ができた。研究や出版の話もしたが、大学づくりには多面的な角度から問題提起をしていた。彼は研究活動に不熱心な人々が大学づくりに参加しても意味がない、札大にはいいスタッフもいるが、それを帳消しにするスタッフもいる、やる気さえあれば研究・教育・大学づくりの3本は並行して走らすことができる、札大はいくらでもいい大学になれる、といったことを喋っていたように記憶している。高橋さんは本当に酒が好きで酒量も多いが、まったく崩れないひとだった。わたしは酒量が多くなると、顔はつぶれるし、ろれ

つも回らなくなることを常としているが、高橋さんはそれがまったくない。上手な酒の飲み手だと思った。バリ島のホテルでは下川氏、鵜浦氏らとテニスを楽しんだが、かれは蛙飛びのような格好でうまくボールを裁いていた。そんなに上手なら日本に戻ったらやろうよ、といったらゝひとには隠し芸のようなものがあってもいいでしょう”と照れていた。

ホテルのプールでは派手な海パンを身につけ平泳ぎを披露した。これもうまい。人もまばらな椰子の木立に囲まれたプールでゆったりバリの休養を楽しんでいた高橋さんの姿が眼に焼き付いている。

北湯沢にある仙流荘と名付けたわたしのあばら屋で、さんざん飲んだあと卓球のお手合わせをお願いしたことがあった。わたしは選手経験こそないものの小学校から卓球を続けているのでめったにひとには負けない、そんな自負があった。しかし21ゲームでなかなか勝てない。真剣になればなるほど酔いも醒めると、勝つ心がむき出しになる。何セット闘ったか忘れたが1セットもとれなかった。脱帽というほかない。どうしてこんなに強いんだ。頭を傾げるばかりであった。

高橋さんは学生を大切にした。居酒屋「いまから」で学生とのコンパをよくやっていた。学生の飲食費の一部を高橋さんが支払っていたのもよく見ている。

高橋ゼミの論集をみた経済学部岩崎教授は「脱帽だ、いままで私を越えるゼミ論集は出ないものと思っていたが、高橋ゼミには越えられてしまった。学生の論文に細かく手を入れていることも凄い」と絶賛した。

学生との付き合いも教授の高い視点ではなく、学生の目線で接触していたから学生にも「俺はいま、板挟みになって大変なんだよ」（ゼミ生の声）と学内行政の矛盾をちらつかせたりした。

「あのひとは尊敬しちゃうね。勉強が凄いのにはいばらない、大学の将来を本気で考えている」加藤外国語学部長がつぶやいた。

高橋さんは多くの人に惜しまれ、讃えられ、尊敬されて生涯を閉じた。最後のけじめがまた、すばらしい。

遺言は葬儀はするな、親族の密葬にせよ、香典、供物は受け取るな、だったらしい。

高橋さんは、ひと付き合いを大事にしてきたし、ひと付き合いが広がったからこれまでどれだけ葬式に参加し、どれだけの香料を支払ってきたことか、想像にかたくない。しかし、自らの辞世には報酬は求めない。

密葬には20人程度の親族や親しい友人がいた。亡骸には素的な人生を送った喜びのようなものが浮かび上がっていた。亡くなる1か月ほど前、すっかりやせ細った高橋さんに大学の廊下で会った。「一年くらい療養のため休暇をとってゆったりした時間を過ごしたい」。これが、わたしが高橋さんから聴いた最後の言葉であった。高橋さんはその休暇を取ることなく逝ってしまった。本当にすばらしい生き方をされた方だと思う。

ご冥福を祈ります。